



## 「人の世に熱あれ 人間に光あれ」

これは「水平社宣言」を締めくくる有名な言葉です。「すべての人に温かく、誰もが希望を持って生きられる社会を望む」と言い換えることもできるでしょう。

この宣言は、1922年（大正11年）3月3日、京都市で開かれた全国水平社創立大会で採択された宣言です。日本で初めての人権尊重を掲げる宣言で、今年で百年を迎えました。

水平社は、身分制度、部落差別により、過去に長く虐げられてきた人たちに団結を呼びかけ、部落差別からの解放と、人間の皆が平等な社会を築くことを願う活動する目的で結成されたものです。

宣言の50年前の明治維新直後、いわゆる「身分解放令」が出され、江戸時代までの身分制度が名目上廃止されました。しかし、差別をなくすための具体的な施策は伴わず、社会の中の厳しい差別は変わることなく残りました。逆に、身分により押し付けられたことで生業となっていた職業や産業は、市場に開放されて収入を絶たれ、税金や徴兵の負担が新たに加わり、被差別部落の苦境は一層深まりました。「融和」といった表現での周囲の支援活動もありましたが、憐憫や同情に基づくもので、本当の平等や人権を担保するものではなく、差別される方々をより惨めな存在に貶めるものでした。

これを背景に水平社は立ち上がり、宣言で、「差別される本当の苦しき痛みを知る自らを誇れ。だからこそ我々には、差別のない、人権が認められた平等な社会を築く力がある。」と謳っています。

ここに宣言の全文を掲載することはできませんが、短文なのでぜひ一度目を通してみてください。部落差別の実相や苦しき痛み、社会を温かいものに変えるために立

ち上がる切実な決意が胸に迫ります。この機に部落差別の歴史を知り、現在を考えていただきたいと思えます。

水平社宣言を部落解放運動の枠内でもとらえている方もあるかもしれませんが、宣言の本旨は普遍的なもので、現代で認識されているさまざまな差別、人権課題に置き換えてもそのままあてはまります。今も色あせない人権を希求するメッセージです。

水平社は、太平洋戦争下の戦争翼賛体制に抗していったん消滅し、戦後、後継組織に移行します。戦争はこれほどの理念、志をも抑え込んでしまいます。それほど戦争は人権を無視します。人を殺すことで成果を目指す行為なので当然ではありませんが。

2022年3月初旬、世界は未だコロナ禍の下にあります。追い打ちをかけるように2月下旬には、世界規模の大災害の危機をほらんだ戦争が始まってしまいました。世界が初めて経験する規模の度重なる災いによって、潜んでいた偏見がまた力を得て現れ、既存の差別は肥大化しようとしています。

今、水平社宣言を読み返すと、「人権」や「平和」は、希求の声をあげ続けなければ守られないと思知らされます。



昨日まで差別する側だった人が今日は差別を経験しています。

混乱に飲み込まれず、差別と憎しみの連鎖を防ぎ、生命と人権の世界的危機を乗り越える強い意思を、百年を経て「宣言」から学びたいと思います。「誇りうる人間の血（宣言より）」を涸らすことのないように。